

## 緒論

一般に都市の景観は、各都市の地形や緑に代表される自然景観および人間の諸行動に関係した人文景観に基づいて、形成されている。人類の歴史上で文明の最高の表現が都市であると仮定すると、都市の発展とは人類の進化過程と同様に、自然に対応しながら人工的な環境を創出してきたことであるといえよう。すなわち、人間が自然環境のどこかに都市をつくり、時間を経るにつれて、人口の集積は増加し、これに対応して都市景観が変化してきたと考えられる。都市の形成過程をさかのぼると各時代において、それぞれの特有な景観が存在したといえる。このことは各時代での人間生活を通じて、時間と空間の場において、物理的な景観が形成されたことであり、この景観は社会の中の人々と密接な関係にあったといえよう。換言すれば、人間は自然の一部として、進化過程において創造的であることを追求しつづけた結果、都市景観の変容が発生したと考えられる。したがって、各都市は、その自然的背景を人文的背景とを基礎にして独特な都市景観を保有していると考えられる。

特に、19世紀後半の産業革命を契機とする大規模な工業化が都市の発展を促すと共に、村落地域も次第に都市化する傾向にあった。都市景観の面では、市域の拡大、人口の増加、構造物の増築、オープンスペースの減少などの量的な変化と共に、自然や緑地の破壊、大気汚染、公共施設の不備などの質的な悪化が発生した。

一方、アメリカの造園家であるオルムステッドは、都市居住者のために、自然が提供する美しい都市景観を創造すると同時に、快適性(Comfort)、利便性(Convenience)、健康(Health)などを人間の活動環境としての都市に配慮しなければならないことを主張していた。また、オルムステッドは1869年にC・ボートとともに世界最初の田園都市(Gardencity)と言われるリバーサイドを計画した。さらに1893年にシカゴ万国博覧会場では、パーナムの「広々としたスペースと自由な方向を持つヴィスタのセンス」のデザインが採用された。会場に付随したミシガン湖畔の計画ではオルムステッドおよびコッドマンとの協同設計に加え、「一種の擬似都市」として新たな調和のある都市景観の美しさが演出されていた。これはアメリカ人が望んでいた都市の姿に共鳴した端緒であった。また、ロビンソンは、都市美化運動に関する著述で1890年から1901年にわたって、先導的に主張を続けていた。その結果、都市美化の重要性が一般国民に認識され、その動きも盛んになりつつあった。他方、イギリスでは、E・ハワード著の「明日の田園都市」が1902年に発行され、田園地帯に囲まれているところに産業と健康な生活のための魅力ある設計を持つ田園都市を提案した。そして、1903年に第一号としてレッチワースが着工された。1913年に国際田園都市・都市計画協会(現在の国際住宅及び都市計画連盟)がE・ハワードの努力で創立された。これらの動きは、人間を主体とした斬新な施設であるレクリエーションセンター、広場、公園、開放的なオープンスペースなどを伴った都市景観的側面を重視した都市美化運動や田園都市運動等を推進しつつあった。

日本では、明治維新以来、欧米文明が導入された結果、経済が発展するとともに都市が高密化し、さらに市域の拡大が発生した。また、都市景観も大幅に変容した。1930年代に入ると工場からの排出ガスの増大、宅地開発の活発化などによって、大都市およびその周辺地域での環境は悪化し、同時に自然環境の保全や公園の設置が社会の主要な課題になった。その時期に、辻村太郎の「景観地理学講和」、都市美協会の設立と機関紙の発行、都市計画運動の先駆者としての「建築と社会」誌などが都市景観の論説や都市美化運動を積極的に展開した。また、都市計画法(1919年)での風致地区の規定が無秩序な市街化形成に関する施策として、本格的に実施された。都市の内部及び周辺の自然環境・歴史的環境・伝統的な構造物などの保存や保全、さらには公園緑地、レクリエーション施設などの設置は、積極的に都市景観計画的側面から配慮された。近年、都市空間の計画に関係する分野では、都市景観に対する関心が非常に高まりつつある。日本での26都市を対象とした都市景観に対する関心及び整備の具体化に関するアンケート調査によると、各都市は快適な都市環境の整備を行うための施策として、都市景観、都市の美観、自然景観、歴史的景観、美しい町づくり等と呼称は相違するが、都市景観整備の動きがそれぞれの都市総合計画において新たな中心課題になっていることがわかる。さらに、都市景観を整備するに際して、単に物理的な諸都市施設の配慮だけでは不十分であり、人間をも含めた都市景観の全体的質の向上を目指すものであるといったことが重視されている。

一方、都市の景観形成の歴史に関する研究としては、辻村太郎や藤岡謙二郎による都市や地域の景観に関する歴史地理学的側面からの追求等がある。

都市の景観計画の理念に関する研究としては、久保貞やG・エクボやローレンス・ハルプリン等による人間生態学的観点からの探求がある。本論では、久保貞が行ってきた都市景観に関する研究「造園計画に関する基礎的研究」、「造園学の新しい研究方法の開発とその展開」等を基礎にして、景観に対して論理的究明を行った。また、筆者は大阪府立大学緑地計画工学研究室の研究グループの一員として「人間活動を基調にした河川景観の解析」、「河川公園に対する利用者の景観認識構造」等の研究に参加し、景観に対する人々の日常的な反応行動を通じた解析等を行った。また、一つの都市の新市街地開発に際して都市における景観形成の歴史を十分に認識し、都市の自然的環境、社会経済的諸状況、人間行動などを考慮に入れた上での良好な景観計画・設計に対する示唆を得ることをも目的として本研究を実施した。

本論文のケーススタディ地区である神戸市では最初は村落であったが、開港以来、人間の手で長い年月をかけて現在みられるような国際港都として生長してきた。そして前述した研究方法に基づき、神戸の歴史的背景をさかのぼることにより、歴史地理学的観点から都市景観の変容に関する知見を得た。

また、神戸市内から立地環境が相当に異なる5住宅地を抽出し、居住者に対して住宅地の人間をも含めた全体景観や住みごこち等に対しインタビュー調査を実施することで神戸市のらしさを探求した。さらに神戸市内から景観特性が顕著な25地区を抽出し、それらの地区に対する人々の日常的な生活行動を通じた景観に対する認識の仕方をも究明した。

本論文は、5つの章から構成されている。第1章では、本論の研究目的及び研究方法について、具体的に述べた。

第2章では、従来の景観概念を都市景観計画的な視点から考察した。また、都市らしさや緑地景観に関する定義を試みた。

第3章では、ケーススタディとして、神戸市の歴史や立地環境や外国の影響などに基づいた歴史地理学的側面から、神戸の都市景観の変容について考察するとともに、神戸市の景観資源の分布状況を把握した。

第4章では、インタビュー調査を通じて、人々の反応結果から、神戸の都市らしさや緑地景観の良好さに関して考察した。また、インタビュー調査で得たデータを基礎にして都市景観の構造を人間行動の側面から解析した。

第5章では、各章をまとめた本論文の摘要である。

なお、本論文は恩師大阪府立大学農学部久保貞教授の終始懇切な御指導を得て遂行されたものであり、中谷三男教授、高橋理喜男教授の諸先生からは、本論文の綿密な御校閲を賜った。ここに以上の先生方に厚く御礼を申し上げる。また、本論文のケーススタディエリアとしての神戸市での調査に際して住宅・都市整備公団関西支社及び神戸市公園緑地部の皆様から絶大な御協力を得たことを記して謝意を表明する。さらに、本研究を進めるにあたって御助言や御協力をいただいた大阪府立大学農学部阿部大就助教授、中瀬勲講師、上甫木昭春元助手、伊藤康則元助手、増田昇助手、下村泰彦助手、片桐保子教務技師の各位に謝意を表明する。また、昭和58年度の大阪府立大学大学院の宇都正嗣、4年生の穴見良二、高橋純一、森下真吾、藤本敏夫諸君にはインタビュー調査やデータ処理に関して協力を得たことを記して深く謝意を申し上げる。